

高等学校芸術科書道における

鑑賞に関する実践的研究

神野 雄 二

一 はじめに

『高等学校学習指導要領』第二章 第七節 芸術 第二款 各科目「第一〇―一二」における「書道Ⅰ―書道Ⅲ」の目標は、生涯学習を視野に入れたつ、書の伝統と文化に対する一層の理解を深めることを指摘している。そしてその目標を達成するために、これまで以上に鑑賞指導の在り方が問われることとなった。

また、各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱いは、言語活動の充実に加えて、「地域や学校の実態に応じて、文化施設、社会教育施設、地域の文化財等の活用」や、学校図書館等の活用、コンピュータや情報通信ネットワークなどを生かした幅広い学習を通じた生徒の興味・関心を高める工夫をした指導が求められている。

郷土に関係ある文化人や芸術作品を取り上げ、鑑賞の教材にすることは、書に対する興味・関心を育むと同時に、書に対する伝統と文化を尊重する態度を育てることにもなるだろう。

これまでは芸術科書道では表現中心の指導が行われ、鑑賞指導がなされたとしても、生涯教育・生涯学習を見据えた指導が行われることは少なかった。今後、地域的特色を研究し、それを書写書道教育に有効に活かすための教材開発は重要だろう。

本稿では、地域教材資料（郷土資料）を使用しての鑑賞のための実践教育を行い、高等学校芸術科書道における鑑賞教育の在り方について考察するものである。

二 熊本に関わる地域教材の基礎資料・文献

熊本の手写書道の地域教材に係わる主たる基礎資料・文献を挙げる。これら以外では、新聞記事や雑誌等の逐次刊行物があるが、当時の時事情報を得るに最適な情報源である。幾らかの例外を除いては社会現象を忠実に報告しており、後代において史的資料として貴重な文献となる。ただ保存となると量と紙の劣化の問題がある。最近ではマイクロフィルム化が進み閲覧が容易になってきた。数著について多少の注解を施しておく。

- ・『熊本肥後文教史』（下田一喜著、第一書房、一九八一年六月）（復刻）
- ・『肥後藩の教育 藩校「時習館学」入門―寺子屋・私塾・藩校の実情』（堤克彦著、トライ、二〇一四年五月）
- ・『熊本県史 総説編』（熊本県、一九六五年六月）
- ・『図説熊本県の歴史』（河出書房新社、一九九七年十一月）
- ・『熊本県の歴史』（松本寿三郎他著、山川出版社、一九九九年四月）
- ・『熊本県大百科事典』（熊本日日新聞社、一九八二年四月）
- ・熊本県に関する人文科学・社会科学・自然科学のさまざまな項目を盛り込んだ郷土百科事典。人物の略歴を知るのに最適である。
- ・『新熊本市史』全二二巻（新熊本市史編纂委員会、一九九六年―二〇〇二年）
- ・『熊本大学六十年史』（国立大学法人熊本大学、二〇一二年一〇月）
- ・『永青文庫叢書細川家文書中世編』（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編、吉川弘文館、二〇一〇年五月）
- ・『熊本研究文献目録人文編Ⅰ―Ⅳ』（熊本県企画開発部文化企画室編、一九九〇年三月―一九九四年三月）
- ・一九四五年八月から一九八九年九月までに熊本県内で発行された雑誌から、論文・記事などを採録したもので、採録された文献は六〇〇〇件余りである。「人物」の項目に熊本の人物の参考資料が記載されている。
- ・『熊本県郷土人物文獻目録』（熊本県立図書館編、一九九一年三月）
- ・熊本に縁のある人物一三二七名に關しての目録で、参考となる文献を探すことができる。
- ・『肥後の人物ものがたり』（熊本県教育振興会編、一九八八年一二月）
- ・『熊本の人物』（鈴木喬編著、熊本の風土とこころシリーズ第三集二五、熊本日日新聞社、一九八二年一月）
- ・『熊本県人』（渡辺京二著、新人物往来社、一九七三年六月）

・『異風者伝 近代熊本の人物群像』（井上智重著、熊本日日新聞社、二〇一二年一月）

・『熊本の文学碑』（能暘石編著、熊本日日新聞社、二〇〇八年六月）

熊本の全県下の文学碑の拓本集で、著者本人が熊本県内を回って拓本を採取したもので、収録数五〇〇基を超える。まさに労作であり地域資料（郷土資料）として価値がある。

・『くまもと文学紀行』（熊本県高等学校教育研究会国語部会、二〇〇五年五月）

・『阿蘇の文学』（中村青史監修、阿蘇の司ビラパークホテル、一九八九年七月）

・『民友社の文学』（中村青史著、三一書房、一九九五年十二月）

・『熊本の美と心』（熊本日日新聞社、一九八四年六月）

・『郷土に於ける書の調査研究』（熊本県高等学校教育研究会書道部会、一九七一年八月）

・『熊本県の美術』（熊本県立美術館、一九九五年三月）

・『Hando to Lando』（Hando to Lando編集室）

三 鑑賞教材の理解のための解説資料四種

郷土に関係ある偉人・芸術作品を取り上げ、鑑賞の題材に活用することは、書に対する興味・関心を育むと同時に、郷土に対する愛好の念を深めることになるだろう。また生涯に亘って書を尊重する心情と書の伝統と文化を重んじる態度を育てることに繋がっていきこう。

郷土には郷土の偉人がおり、まだ世に出ていない文化人もいるであろう。昨今、情報は瞬時に行き交うが、本当の意味での人や時代や風土が理解されているといえるかどうか、甚だ疑問である。静かに物を観る、そして考えるここからしか真実は見えてこない。自分が生活した郷土をじっくり観ることは意味がある。「地方の眼」は大切である。私はこれまで鑑賞教育のよりよい在り方のための基礎研究を進めてきた。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾

「郷土の偉人―人とその書―」として、ここでは熊本県に関わる四人の偉人を例に取り上げる。他に、熊本大学に関わる偉人は参考として提示した。

地域教材資料を使用した高等学校芸術科書道における鑑賞の実践において、鑑賞教材の参考として配布した解説資料を提示する。

1、郷土の偉人（徳富蘇峰―人とその書―）

徳富蘇峰（一八六三（文久三）一月二五日―一九五七年（昭和三二）一月二日）は、肥後国葦北郡水俣郷（熊本県水俣市）の豪農徳富一敬と久子の長男として肥後国上益城郡杉堂村（現益城町）の母の実家で生まれる。ジャーナリスト、思想家、歴史家、文学者、評論家である。明治・大正・昭和の三つの時代に亘り活躍した。また、政治家としても活動し、戦前・戦中・戦後の日本に大きな影響を与えた。本名は猪一郎（いいちろう）。字は正敬（しょうけい）。筆名は菅原正敬（すがわら・しょうけい）、大江逸、大江逸郎。蘇峰と号し、別号は山王草堂主人、頑蘇老人、蘇峰学人、銑研、桐庭、氷川子、青山仙客、伊豆山人など。生前自ら定めた戒名は、百敗院泡沫頑蘇居士（ひゃばいいんほうまつがんそこじ）。熊本洋学校から同志社に学び、一八八二年帰省して大江義塾を開く。民友社を設立し「国民之友」を創刊、更に「國民新聞」を創刊し日本言論界に不動の地位を築く。「國民新聞」を主宰し、歴史書『近世日本国民史』全百巻を著したことで知られる。文豪・徳富蘆花の兄にあたる。享年九五歳。

蘇峰の書は、外連味のない潔さにあり、剛毅である。書簡も同様で、肉太の線でぐいぐい押し切っていく。「立春大吉」は、彼晩年九二歳の書である。その筆力には驚かされる。

父の尊敬（かずたか又はいっけい）は、熊本県水俣市の出身。惣庄屋の徳富美信・直子の長男。矢野久（久子）と結婚した。横井小楠の高弟。通称は太多助、太多七、洪水（きすい）と号す。儒学者（朱子学者）、官僚、教育者で、明治新政府下の熊本の政治教育に貢献した。

藩校時習館に学び、のち横井小楠の門下となる。一八五一年帰郷して、翌年葦北郡宰付監察に推挙され、民政に尽力する。維新後、一八六九年熊本藩奉行所書記兼録事となり、藩政改革に当たった。後、民政大属となる。廃藩置県後、熊本県典事、白川県七等出仕、県会議員となるも病のため退職した。

一八八〇年、熊本に実学党の教育機関である私立中学校共立学舎の設立に参加して、漢学部で教鞭を執った。一八八二年、長男の徳富蘇峰が開いた大江義塾でも漢学を講義した。一八八六年、蘇峰に従い一家で上京する。墓は多摩霊園内の徳富家墓所にある。享年九二歳。

「親愛掃百邪」は、洪水の最晩年の書である。ゆつたりとした顔法によるも

ので、儒学者らしい謹厳実直な人柄がよく表れている。温和で穏やかな書風である。

次に、蘇峰や徳富家に関する名所旧跡に次のものがある。

○徳富蘇峰館

同館は、徳富蘇峰の業績を顕彰・普及させる目的で、一九九八年に開館した。彼の直筆原稿・掛軸・絵画・扁額・書簡・愛用品・肖像写真・著書・研究書・関連雑誌等の資料を所蔵し、約一五〇点の資料を展示している。また、映像や検索用パソコンによる蘇峰の紹介も行っている。

展示室は「蘇峰と山中湖」「蘇峰の生涯」「蘇峰四人の師」「蘇峰の多彩な交友」と充実したコーナーを設けている。

山梨県南都留郡山中湖村平野五〇六―一九六

○徳富蘇峰記念館

同館は、蘇峰晩年の秘書を務めていた塩崎彦市が、蘇峰の一三回忌にあたる一九六九年に二宮の塩崎邸内に建築した。蘇峰は、数多くの書簡・蔵書・揮毫・原稿・遺品を塩崎に託した。塩崎は、蘇峰の研究に資するために、託された多くの近代史の資料を公開する目的で記念館を建設した。塩崎亡き後は、遺族が「財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団」を設立し、博物館になった。

神奈川県中郡二宮町二宮九六一番地

○徳富記念園

同園には、旧居と徳富記念館とがある。約二〇〇〇点に及ぶ資料や遺品が展示されている。またここは、蘇峰が生徒の自治を尊重する民主的な学校を目指した私塾「大江義塾」跡地でもある。

熊本県熊本市中央区大江四丁目一〇―二三

○水俣市立蘇峰記念館

同館は、その前身である洪水文庫（旧水俣市立図書館）として一九二八年に起工され、一九三〇年開館された。

一九七九年、洪水文庫は新たに設立された市立図書館へと移転した。それに伴い文庫を改装し、一九八三年に「蘇峰記念館」として開館した。展示は、徳富兄弟の蔵書や遺品など約二〇〇〇点を収蔵・公開している。

熊本県水俣市陣内一―一

○徳富蘇峰・蘆花の生家

生家は、一七九〇年、徳富家中興の祖徳富久貞により建てられた。一八七

〇年、洪水が熊本藩庁に招かれ、一家が熊本に移り住むまでの八〇年間、徳富家はこの家を居とした。その後、一八八九年からは代々西村家の商家（屋号は衣屋）として受け継がれた。現在の建物は、徳富家時代の三棟（主屋・蔵・はなれ）と、西村家時代の二棟（主屋・蔵）の五棟である。坪庭は徳富家時代のものである。

熊本県水俣市浜町二―一五

2、郷土の偉人（徳富蘆花―人とその書―）

徳富蘆花（一八六八（明治元）―一九二七（昭和二））は、明治大正期の小説家である。名は健次郎。肥後国（熊本県）葦北郡水俣に、徳富一敬と久子の次男として生まれた。ジャーナリスト、思想家、歴史家、文学者、評論家、政治家として活躍し、大著『近世日本国民史』を著した徳富蘇峰（一八六三―一九五七）は実兄である。蘆花には賢兄に対するコンプレックスがあり、徳富の「富」を兄とは異なる「富」の字で生涯通した。号については、彼自身が、随筆に『蘆の花は見所とてもなく』と清少納言は書きぬ。然も其の見所なきを余は却って愛するなり」と由来を記している。小説『不如帰』や随筆『自然と人生』などで知られる。岩波文庫版『自然と人生』は、明治三三年出版の復刻本で、蘆花の書跡が手軽に見られる。また愛用の蔵書印「千歳村 徳富」は、蘆花自筆を彫らしたものである。同書掲載の「風景画家コロオ」は、蘆花の芸術観が見られる。このことは、改めて述べたい。私達書家にとって書論は大切だが、文学論や画論にもっと耳を貸すべきだろう。享年五八歳。

熊本市内に徳富記念園があり、ここは明治三年から兄弟が幼少時代を過ごした徳富旧邸である。蘇峰が明治一五年から一九年まで設立した、生徒の自治を尊重する民主的な学校を目指した私塾「大江義塾」の旧跡である。大江義塾から、中国革命に尽くした宮崎滔天など多くの人材を輩出した。蘆花は、明治九年一〇月、神風連の乱が勃発した時、旧邸の中二階から炎上する町並みを目撃し、「恐ろしき一夜」にその様子を記している。同園には、旧居と資料館とがある。資料館には徳富兄弟関係の遺品や著書・書簡などを多数展示している。また、庭の一角に蘇峰の師新島襄がアメリカ土産に贈ったカタルパの木がある。館長の話によると、原木はすでに枯れ、今四世であるとのこと。裏手に徳富兄弟が使用した井戸も残されている。

次に、元尚綱大学教授能暘石先生（一九二三～二〇〇七）の『熊本の文学碑』に、熊本に建碑された蘆花の石碑を四基挙げる。

- （１）徳富蘆花文学碑（菊池市）・（２）徳富蘆花歌碑（水俣市湯の児台地）・（３）徳富蘆花文学碑（水俣市陣内）・（４）徳富蘆花歌碑（水俣市日本一長い運動場）

能先生に、生前一度、平成一八年熊本県立美術館で開催された文学碑拓本展の際にお会いしたことがある。先生からのご依頼で、熊本大学にある漱石の像の台座、俳句碑の写真と寸法を知りたいとのこと、調べてお送りした。『熊本の文学碑』は労作、熊本の全県下の文学碑の拓本集で、奥様とともに県内を回って自ら拓本を採取したもので、収録数五〇〇基を超える。能先生は志半ばで逝去されたが、編集委員の尚綱大学教授の久多見健先生ら三名がその意志を引き継がれ二〇〇八年に刊行された。このような業績は地域資料（郷土資料）として価値が高い。

蘇峰と蘆花の筆跡は、『文士の筆跡―作家篇Ⅰ―全五巻（伊藤整編、二玄社、一九六八年五月）に数点掲載されている。

蘆花の書は、文学者らしいとつとつとした中に深い味わいを見せる。抑揚があり線の太細の変化が著しく、横画は右上がり、線質は頗る強い。これは蘇峰の筆跡と類似するところである。一文字を大きくしたり、中の一画を太く強調するが、これは、書簡・原稿・短冊に見られ、彼の剛毅な気質を示すものと言えよう。

今回、蘆花を知るため、熊本市内にある古書店を訪れた。郷土の人を知るためには、まずすべきことであろう。そして古書目録の調査も欠かせない。熊本では、舒文堂と天野屋書店の名が挙げられる。舒文堂は古書目録を刊行しており、『九州の郷土史』（『舒文堂古書目録二九号』、一九九九年）に、蘆花の書簡が三通掲載されている。蘆花の折帖の揮毫を見せていただき、「蘇峰に比べると、蘆花の資料は極端に少なく、一〇〇分の一だ」、「蘇峰晩年は秘書が書を揮毫していた」、「以前は、三島由紀夫も来て静かに古書を見て購入していた」とか、店主との話は興味が尽きない。地方の研究は、地方に利あり、か。もつと地方文化の掘り起しがなされるべきだろう。

3、郷土の偉人（宮本武蔵―人とその書―）

宮本武蔵（一五八四（天正一二）～一六四五（正保二）六月一三日）は、江戸時代初期の剣術家で兵法家として著名である。名字は宮本、または新免、通称は武蔵、幼名は辨助。二天、二天道楽と号す。二刀を用いる二天一流兵法の開祖として天下無双の呼び声が高い。また、国の重要文化財に指定された『鵜図』・『枯木鳴鶴図』・『紅梅鳩図』の水墨画や、黒漆塗の鞍・木刀などの工芸品を残している。享年六四歳。

武蔵に関わる物語は、巖流島の戦いなどが江戸時代から脚色されて大衆文芸作品の歌舞伎、浄瑠璃、講談などの題材にされた。一九三〇年代、吉川英治が朝日新聞に小説『宮本武蔵』を連載し、剣士武蔵のイメージが一般に広く定着することとなった。私は東京時代、武蔵五日市に住んでいたが、吉川英治記念館が青梅にあり何度か尋ねた。風光明媚で吉川氏がまるでそこに坐しているような錯覚さえ覚えた。また漫画家井上雄彦氏による『バガボンド』は、原作は、吉川英治の小説『宮本武蔵』による漫画で、一九九八年から『モーニング』で連載が開始され好評を博した。井上氏は熊本大学で学ばれている。二〇〇九年四月、熊本市現代美術館で「井上雄彦最後のマンガ展 重版『熊本版』最後の武蔵」の展覧会が開催された。また熊本近代文学館では例年「武蔵忌句会」を開催している。武蔵忌（二天忌）を季語に俳句を作る句会で、私も参加させてもらっている。句会に出席するたびに、俳句の難しさ、正岡子規の偉大さを痛感させられている。

武蔵の著した『五輪書』は兵法書で、代表的な著作である。自筆本である原本は焼失したとされ、細川家本・楠家旧蔵本・九州大学本などの写本で伝えられる。一六四三年から一六四五年にかけて、熊本県熊本市近郊の金峰山にある霊巖洞において、死の直前まで執筆されたとされる。また武蔵の死後に弟子により創作されたという説もある。兵法書だが内容は多岐にわたっており奥深い。過日霊巖洞に足を運んだが、現在には有明海を見下ろすすみかん畑に囲まれた景勝地にあり、何か異様な雰囲気のある岩洞である。『五輪書』『水之巻七』の一節「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす。能々吟味有るべきもの也」は、身につまされる。

武蔵が熊本を訪れたのは、寛永一七年（一六四〇）、五七歳の頃で細川忠利公に仕えた。三百石の客分待遇で、千葉城跡に居宅を与えられた。以後、一六四五年初夏に没するまでの晩年五年間を熊本で過ごした。熊本は武蔵終焉

の地である。この間に『五輪書』や『兵法三十五箇条』などを著し、茶・禪・書画三昧の日々を送った。武蔵は書画人としても秀れ、鋭い気迫ある作品は、日本の水墨画史上に特異な位置を占めている。

私が広島から熊本に來た頃、ちょうどNHK大河ドラマ「宮本武蔵」が放映されており、不思議に武蔵と自分をだぶらせたものであった。また篆刻を刻す時、武蔵の剣の如く一刀で刻せぬものかと考えた。熊本には、武蔵に係わる遺跡が多いが、中でも武蔵塚（墓所）や霊巖洞は著名。また島田美術館や永青文庫は武蔵の遺品を多く伝える。武蔵の書画は、剣豪の書で、墨の濃淡が美しく、澄み渡った線は魅力に富む。NHK大河ドラマでの武蔵と小次郎の巖流島の決闘シーンのロケが天草牛深市の茂串海岸で撮影されたが、何とも美しい砂浜である。

4、郷土の偉人（種田山頭火―人とその書―）

種田山頭火（一八八二（明治一五）―二月三日―一九四〇（昭和一五）―〇月一日）は、自由律俳句を詠んだ著名な俳人の一人である。本名は種田正一。山口県防府市の大地主だった種田家の長男として生まれた。漂泊行乞の中に身を置いた。萩原井泉水に師事し、尾崎放哉は良きライバルだった。生涯一万数千句の俳句を書き遺した。昭和一四年（一九三九）、松山市に移住し「一草庵」を結庵。翌年、この庵で生涯を閉じた。享年五八歳。

熊本と愛媛に関連の放浪漂泊の俳人種田山頭火を取りあげてみたい。

実は、私は現在山頭火が住居を構えていた近くに住んでいる。彼がこの附近を散策していたのではと想像すると、それだけで何とも楽しい。

彼の熊本での足跡を精しく述べる紙幅はない。概略を記す。山頭火は一九一六年、友人を頼って妻子と熊本へ移る。同年、熊本市下通り町一丁目にて古書店（後、額縁店）「雅楽多書房」を開業。熊本市内で泥酔し、路面電車を止めた逸話もある。

一九三一年、熊本市春竹琴平町に貸室の二階一室を借り、「389居」と称して、自炊生活をする。また個人誌『三八九』（さんぱく）を発行する。ここが、私が一〇数年住んでいる住居と目と鼻の先である。

彼の書は、俳人の書であり、俳句の呼吸がそのまま書に表現されている。言葉の持つ強さであろう。借り物では、感興が湧きにくい。見れば山頭火とわかる書であることが、心憎い。そして自然でなまめかしい。俳句書や俳画

は、もっと研究すれば浮世絵に匹敵する日本の墨芸術が生まれるのではなからうか。卒意の書、ここに書の命がある。

二〇一〇年四月、愛媛松山の山頭火終焉の地「一草庵」を尋ねた。ころりと死ぬことを望み夢かなった彼が何とも羨ましい。

四 地域教材を使用しての臨書と鑑賞

前掲の「三 鑑賞教材の理解のための解説資料四種」とともに、郷土資料を用いた書道教育を考えるために、鑑賞と臨書の資料として、次の四点の図版資料を配布した。質問は、以下の二点である。被験者は、熊本大学教育学部の書写・書道を履修する国語科の学生一〇名である。回答を分析し今後の教科書教材の在り方を探ってみたい。

質問①

地域教材資料（郷土資料）を芸術科書道へどのように活用できるか、学習指導要領を踏まえ考えることを述べなさい。

質問②

熊本に関係する地域教材資料（郷土資料）を学習して、また臨書して考えたことを述べなさい。

郷土資料を用いた書道教育を考えるために次の四点の作品資料の臨書を行った。

- （1）徳富蘇峰「立春大吉」（行書立軸）
- （2）徳富蘆花「短冊二点」（短冊）
- （3）宮本武蔵「戦気」（行書立軸）
- （4）種田山頭火「分け入っても分け入っても青い山」（短冊）

質問①に対する回答

○現在の芸術科書道において、学習者に馴染みのある書道教材で、基礎的な表現を体得し、その基礎的な表現を踏まえた上で、学習者が自分なりの表現を見つけていくこと、が求められている。そうして、培った学習態度が、学習者にとって生涯学習の土台を作っていくよう望まれているのである。

ここで、一つ目に問題となるのが、学習者に馴染みがあり、かつ、名筆

と謳われている書道教材をいかにして見つめるか、ということがある。二つ目は、書の基礎的な表現を体得し、そこに表現者の自由な営みがあることを学習者にどう感じ取らせるかということである。この二つの問題をクリアさせてくれるものが郷土資料である。

それぞれの地域には、調べてみると、一度は目にしたことがあるような名だたる書家が存在している。芸術科書道において、そのようなビッグネームに出会う学習者はその人物に書家という側面があることを知れば、学習意欲が増すことはもちろん、自分の出身地に縁があると思えば、自分の住んでいる地域の文化に対しても興味が湧いてくるだろう。書写と違い、鑑賞を主軸とした芸術科書道では、臨書をする上において、その書の解釈も人それぞれである。

郷土資料の芸術科書道での活用は、自分の地域の理解に資するばかりでなく、書の理解を深め、表現への興味を学習者に与えるものである。

○臨書をすることで、書道とは、その人の生き方、その時感じたことが表現されたものであり、言葉の意味をより実感することができる。ただ鑑賞するだけでも偉大な書は理解できるが、せっかく出会えたのなら、その書を味わいつくすためにも臨書はこの上ない方法であると思う。

○郷土資料は、「書の美と時代、風土、筆者などのかかわり」について理解を深めるために、非常に有意義な学習材であると考えてる。

○私が、郷土資料を用いる意義として取り上げる理由は大きく分けて二つである。一点目は、実際に直に作品に触れながら、書について学べるという点である。まずは、歴史的に書家として評価のある王羲之や顔真卿の書を学べばよいではないかという意見が出てくるかもしれない。しかし、生徒たちの取っつきやすさに違いがあるのではないかと思う。郷土資料であるならば、自分に身近なテーマであるように感じ、生徒たちも惹かれる点はあるのではないだろうか。熊本の偉人であれば宮本武蔵が大きい。もちろん徳富蘇峰や種田山頭火の作品も挙げられる。

もうひとつの点としては、書の独自性を学べることにあるのではないだろうか。郷土資料の書の中には書風などに捉われていない独自性のある作品が多く存在すると思う。そういったものに触れることで、自分の中の

六

個性ある書を創造していくことに繋がるのではないかと私は考える。

ここまで述べてきたように、郷土資料の活用には①実際に身近な作品に触れながら、書について学ぶことができるという点②教科書だけではなかなか育てにくい独自性を養うことができる、という点で優れていると言える。ポイントでは現在の教科書では学ぶことができないところに焦点を当てられるところであると思う。

○学習指導要領には「伝統」に関わる記述がたくさんあるのだが、これらを通して芸術科書道へどのように活用できるのだろうか。例えばまず、地域という面に目を向けてみる。それぞれの地域の実態にあわせて、文化施設や社会教育施設などさまざまなものがあるだろう。そこにはたくさん地域の書家が書き残した作品もあるのではないだろうか。それらをまずは自分で臨書してみることが大事だ。すると、当時書家が書いていたものを通してどのような背景があり、どのような気持ちで書いていたかを味わうことができる。そうすることでその自分自身の地域理解へもつながるのではないだろうか。

○今回熊本にまつわる偉人の書を臨書してみても、鑑賞と実際に臨書するといふ二つの工程が欠かせないことを感じた。まず鑑賞することで趣が分かる。そこから臨書することで、当時偉人達がどのような気持ちをもって書いたか疑似体験のようなものができるのだ。自分たちの故郷にどのような人物がいたのか、それはただ見るだけ、聞くだけでは縁遠い時代の話になるが、実際に自分で調べてみたり書いてみることで不思議と身近に感じることができるのではないだろうか。

○具体的にはどのような書活動を行えばよいのであろうか。学習指導要領の「第三款」「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」において「2(2)」の項には、「各科目の特質を踏まえ、地域や学校の実態に応じて、文化施設、社会教育施設、地域の文化財等の活用を図ったり、地域の人材の協力を求めたりすること」と記載されている。書というのは書家のみが書くものではない。私たちすべての人が文字を書き、書に携わっているといえる。こういった書道の特性を考えると、書家が書いた書に触れるだけでなく、各方面で活躍した文人たちが残した書に触れることもひとつの書の

学習といえるだろう。そこで、学習指導要領にもあるとおり、地域の文化財の教材利用が効果的ではないだろうか。

地域の郷土資料を教材として用いる利点は主に二つあると考える。

一つ目の利点は、実際にその地へ足を運び、その目で実物を見ることができるといことである。その地域にゆかりの文人たちであれば、その地に記念館や旧跡などが置かれていることが多い。私たちが生活する近くにも非常に有意義なことである。写真で見ただけでは作品の大きさがどれほどのものであるか、墨の濃淡や紙の材質などを知ることができない。実物を鑑賞するということはその書が持つ時代、歴史、筆者の息遣いまで感じることができるのである。

二点目は、郷土の歴史、文人、文化などの知識を深めることができるということである。熊本の郷土の文人として代表的な人物では、徳富蘇峰、宮本武蔵、種田山頭火らを挙げることができる。彼らはそれぞれ、出版界、武芸、俳諧の道で大きな功績を遺した人物である。彼らの書に触れることは彼らが生きた人生、時代など知ることその鑑賞であるといえる。また、郷土に係る馴染みのある土地の文化財は、学習指導要領にもある「書を愛好する心情」を育むことができるのではないだろうか。

質問②に対する回答

ここでは紙幅の関係上、宮本武蔵の書の臨書に対する回答のみを取り上げ、他は略する。

○彼の書の中でも、「戦気」は見たものを圧倒するような迫力を持った書である。紙面に堂々と放たれた字は、思い切りの良さだけで成し得たものかと感じさせつつ、臨書をすれば、その一画目からただならない厳しさを帯びた字であることに気付く。書のみにして、書く者を圧倒させる。彼の実在したときの猛々しさに思いを馳せないわけにはいなくなる。二画目も一画目と同じ太さで力強くはらうことで三画目へとつなげる。まるで人や木をなぎ払うかのようだ。そして、「戦」の字の中央を右斜め上に駆け上がるのは、この字の迫力の要だと言ってよいであろう。「気」の字では、「戦」と同じ位に気高さは感じさせるものの、「戦」の迫力そのままにというので

はなくて、少し静けさが滲んでいるかのような趣を呈している。「戦」も「気」も宮本武蔵の気位の高さと、猛々しさを感じさせる書である。

○宮本武蔵は、江戸時代初期の剣術家である。二刀流である二天一流兵法の開祖であるとともに、多くの水墨画や書を残している。熊本には、寛永十七年より、細川忠利公に仕える剣客として身を寄せている。

彼の書を臨書して考えたことは、とても荒々しく、豪快なものであるということである。一目見ただけでもわかるその力強さが大きな特徴である。中でも、「戦」の字の右斜め下に伸びる一番長い画が、この書の全体を象徴していると感じた。とても力強く、大きく、長く書かれており、見る者に強い印象を与えている。実際に臨書している時も、いつもよりかなり強めに筆を入れていく必要があった。

やはり、剣豪であり、幾度もの死線をくぐり抜けてきた宮本武蔵だからこそ、このような荒々しく、豪快な書になっているのだろう。しかし、ただ荒々しいだけではない。その荒々しさ、豪快さを、均衡の取れた字形に上手く抑えつつ表現しているとも感じた。大きな動きを静め、美しい文字の中に抑えている、ここに武蔵が辿りついた剣の境地が書に表現されているように思える。

○ここでは、熊本の郷土資料の臨書を行った感想を述べていきたいと思う。まずは、宮本武蔵の書である。私は、宮本武蔵の「戦気」という字の臨書を行った。その上で最初に感じたことは、剣豪らしい言葉選びである。生涯一度も負けたことがない熊本に来て靈巖洞に籠り『五輪書』を記したと言われる宮本武蔵には、武士としての力強さ、逞しさを感じることができるとは思えないだろうか。「戦気」という二字の中にも、その気迫が伝わってくる作品であると感じた。

○宮本武蔵の「戦気」を見たときに感じたのが「男らしさ」である。それは熊本でいう「もっこす」という言葉がふさわしいようなものだった。書いたときの感想は、個人的に一番好きな書だった。とても潔さがありカッコいい書である。宮本武蔵自体剣豪だったというのの影響しているのか、一画一画が切り込むように書かれていた。字のバランスという面でも、「戦」の作り部分のはねを少し長めに書いているのがとても特徴的であった。こ

を長くすることで全体のバランスに大きく影響してくるため、臨書する際、特に注意した点である。

○宮本武蔵は天下無双の剣豪として名高いが、「戦気」のほか「鵜図」などの水墨画も多数残しており、書画人としてもすぐれた一面がある。「戦気」は宮本武蔵の豪傑ぶりをあらわしたかのような書である。「戦」の字は読めるものの「気」の字は馴染みのない字形であり、画数、書き順なども一見するとわからない。今回書いた臨書の中では一番難しかったように感じる。しかし、宮本武蔵はマンガなどでも題材になるほど有名な人物であり、佐々木小次郎との巖流島の決戦はあまりにも有名である。しかしその書を目にする機会は少ない。今回宮本武蔵はこのような字を書いていたのかと思いをせながら臨書ができ、書道教育としての生徒の興味関心を引き出すことができるのではないかと思った。

学生に提示した臨書教材は、郷土の文化人という親近感からか、実に生き生きと臨書されていた。地域教材ならではのことと思われる。また質問への学生の回答から、地域の郷土資料を使用した鑑賞指導は、生涯にわたり書を愛好する心情を育て、感性を高め磨く上において、より有効性が認められることが理解できた。郷土資料による書写書道教育の授業実践は、我が国の伝統的で豊かな言語文化を認識し、また文字文化を尊重し、親しんでいく態度を育成することができる。ひいては書を愛好する心情を育てる大きい要因になりうるであろう。

今後はこれまでの狭い鑑賞指導に囚われることなく、時代に適応した教材の開発をしていかなばならないだろう。

五 おわりに

鑑賞教育の研究は、漸進してきてはいるものの、更なる実践研究の成果と蓄積が課題であろう。鑑賞教材としてどのような内容のものを提示するかなどその一つといえる。今後地域的特色の教材の研究を進め、それを書写書道教育に有効に活かすための教材開発を行うことが大切である。

郷土の偉人の書また身近にある文字資料を取り上げることが、手書き文字文化の重要性を理解させる方法として最適であると言える。

八

それは、大学と地域・社会との連携や地域の独自性等を考えることに繋がり、書写書道教育の教材開発などの書の基礎研究になりうる。また書写書道教育に関する新たな資料・文献や書教育者を発掘顕彰していくことにも繋がる。更に地域の文化の発展に寄与することも可能だろう。その意味からも、名所旧跡、地方の図書館、文書館、博物館などの文化施設は、今後更にその存在意義は高まっている。

ここで高等学校芸術科書道における鑑賞教育の在り方を考えるための一つの提案をしてみたい。教科書に、各都道府県の地域の郷土資料を「書で見る郷土資料鑑賞マップ」として作成し、解説文を付す。熊本県でいえば、宮本武蔵の書などは好ましいものと言えよう。

これからはこれまでの狭い鑑賞指導に囚われることなく、鑑賞指導の現状の改善を期して、魅力に富んだ教材を創出する必要があるだろう。そして生涯にわたって文字文化を重視し、さらに文字文化を創造していくことが大切であろう。

毛筆による書写書道教育の学習実践は、我が国の伝統的で豊かな言語文化を認識し、また文字文化を尊重し、親しんでいく態度を育成することが重要である。今まさに毛筆書写書道教育の一層の充実が求められており、特に次世代を担う青少年の育成は急務といえる。

今後は、他の地域教材を用いた実践研究を進めてみたい。そして、郷土の偉人の更なる調査を進めるとともに、各時期各地域の当該関係の文献・資料を集成し、組織的・体系的・学的に研究を深めることを課題とする。それは、わが国の書写書道教育の特色、また地域の独自性等を考えることに繋がり、書写書道教育の教科内容の開拓と教材開発などの書の基礎研究になりうるものと考えらるからである。

本稿を執筆するにあたり、永青文庫、熊本県立図書館・近代文学館、熊本市立図書館には資料の閲覧の便を図って頂くとともに、懇切なご教示を賜った。ここに記して、衷心より感謝申し上げます。

【注】

(1)

・「特別寄稿 熊大の昔と今(1)―夏目漱石―」(『会報』八六号、熊本大学教育学部同窓会、二〇一三年)

・「特別寄稿 熊大の昔と今(2)―小泉八雲―」(『会報』八七号、熊本大学教育学部同

窓会、二〇一四年)

・「私の郷土の偉人④ 嘉納治五郎」(『千書万香』第一九号(萱原書房、二〇一四年九月))

・「熊本大学で教鞭を執られた書道教官について」(『国語国文研究と教育』第五三号、熊本大学教育学部国文学会、二〇一五年二月)

(2)

・「高等学校芸術科書道における鑑賞指導に関する研究」(『国語国文研究と教育』第五二号、熊本大学教育学部 国文学会、二〇一四年二月)

(3)

・「二、芸術論―『千書万香』・『永和』」(神野大光著『神野大光の世界―書・篆刻作品集―』創想舎、二〇一三年三月)

・神野雄二著『書写書道教育論考』(創想舎、二〇一五年三月出版、印刷中)

【主要参考文献】

・加藤達成監修『書写・書道教育史資料』(東京法令出版株式会社、一九八四年)

・『書写・書道教育研究』第一号―二九号、(全国大学書写書道教育学会、一九八七―二〇一四年)

・海後宗臣等編『日本教科書大系・近代編第二七卷(習字)』(講談社、一九七八年二月)

・井上敏夫編『国語教育史資料』(第二巻教科書史)(東京法令出版株式会社、一九八一年四月)

・久米公著『書写書道教育要説』(萱原書房、一九八九年一月)

・富田富貴雄著『史的観点に基づく書写教育の研究』(大学教育出版、一九九六年六月)

・『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』(全国大学国語教育学会編著、学芸図書、二〇一三年三月)

・下田章平・齋木久美「高等学校芸術科書道における鑑賞指導とその展開」(『茨城大学教育実践研究』第三二号、二〇一三年十一月)